新たな戦前へ私たちはどう向き合うのか 1

いのちと暮らしを支える―農と医。新たな戦前にどう向き合おうとしているのか。根本敬会長と親交の深い、齋藤紀医師は、広島で被爆者と向き合い、福島第一原発事故で、今度は被曝と向き合うことになった。今、齋藤医師に聞きたい。いのちと平和について。

（聞き手：根本敬　撮影：佐賀達　文責：岩渕望）

さいとう　おさむ
齋藤　紀
1975年福島医大卒、1977年広島大学原爆放射能医学研究所、1988年総合病院福島生協病院（広島市）院長を経て2009年以降、医療生協わたり病院（福島市）。現在、福島医療生活協同組合理事長、ふれあいクリニックさくらみず所長

話しは2011年3月21日、齋藤医師が講演した「正確に学ぶ放射能・人体への影響」の話から始まる。

積み重ねた体験

根本　先生は、この線量であれば、「私の被爆者の体験からすれば必ず克服できる」と。

齋藤　そうですね。

克服できるという意味は、被爆者の晩発性障害のことに触れたんです。高線量の被爆を受けた被爆者は急性の放射線障害で多くが死んでいった。生き延びた被爆者には晩発性の障害がありました。後年、癌になったりすることですが、やはり相対的に高い線量ほど影響をうけます。被爆者の晩発性障害をずっと見てきたので、そこにふれるのはごく自然なことだった。晩発性障害に対する人間の側の一番有利な点は、10年、20年の時間があるということ。我々の手の中にあるということを言いたかった。しかしこれに触れた瞬間に、ネット上では炎上しました。

被爆者は必死に生き、様々に生きる努力をし、その中には自分たちの健康を管理する、健康でいるという努力もあったのです。福島第一原発事故での放射線被曝は、いろいろな意味で初めての経験でした。被曝そのものを拒絶したいという気持ちのなかで、放射線被曝の健康障害を「理解する」ことの、行為そのものの難しさがあった。「理解する」立場が問われたとも言えます。

根本　でも先生―いろんな批判の中でも揺るがなかったというのは、確信というか、何かあったと思うんですけど。

齋藤　やはりそれは、30年間被爆者を診察し、交流し、長く被爆者とともに裁判をたたかい、トータルな意味での被爆者の実相が教えてくれた。積み重ねた体験が自分の中にあって、紡ぎ出されてきたもの。だから「大丈夫だ」「克服できる」と述べたのです。

医師である父への反発

根本　先生、最初は医学部じゃないですよね？

齋藤　早稲田大学の法学部に行きました。父が医者だったのですが、最初はその道に進む気がなかった。なにか反発があったのだと思います。

根本　先生は青年のとき、父親に反発して何を目指したのですか？

齋藤　そういう明確なものではないんだよね。とにかく東京を目指したいみたいな。一浪して、早稲田に入りました。見るもの聞くもの新鮮でした。大学は「学費値上げ反対」の運動の渦中でした。

根本　その頃の先生を付き動かしたものは何だったですか？

齋藤　高校時代は学校に行くのが嫌で、鬱屈した気持ちでいて、いわゆる政治性はなく、その点では幼かった。でも学園紛争というある意味限られた局面でしたが、早稲田ではそこここに政治が転がっていた。ベトナム戦争も含め、全世界のことが語られていた。デモにやっぱり衝撃だった。デモに行く上でも、何かをしっかり考えなければいけないわけで、自発性という塊が内側から形成されてくる感じでした。しかし東京での生活は、一方で、何か有意義なものが蓄積をされてくる反面、他方で自分の着地点が必ずしも明確にはなり得なかった。悶々としながら、はじめて医者だったら生きていけるかなと思うようになっていた。大学2年の暮れに郷里の盛岡に帰り、翌年福島医大に入った。

根本　医大卒業後、広島に行かれますけど、動機はなんだったんですか？

齋藤　早稲田の時には原爆は私の視野には入ってなかった。福島医大の4年生の8月に広島に2週間行っています。被爆者とも会うし、原爆病院（広島日赤）へも行く、あの当時のABCC（原爆傷害調査委員会）にも行き、中国新聞社の記者にも合う、文化人（歌人）にも会うなど、今思うとかなり大胆な動きをした。8月になると、中国新聞社はいろんな特集をずっと組むんです。毎日出かけて新聞や出版物を買い込んで、読みこんだ。それでなんとなくわかったんですよ。いま原爆被爆者がぶつかっている壁っていうのは、真の援護法がないということ。卒業後の医師生活に広島を選んだ背景に、このような体験があったことは間違いなかったと思います。

福島に帰ってくるのは、震災の2年前、2009年でした。

かさぶた論

根本　農民連の最大のテーマは、これだけ農業従事者が減ってくる中で、新規で農業に飛び込んでくる人たちをどれだけ我々が支えきれるかが最大のテーマなわけです。その時に受け入れ側が、多様性とキャパをどう作っていくのか。私は微かな希望を持っているんです。今の若い世代は、我々と違う、危機の感じ方、それをどんな風に表現するかっていうところで、もがいているというか。今、大人社会自身がものすごく窮屈になっていて、許容できないっていうか。

齋藤　大人社会、あるいは、私たちが作ってきた社会が、子供たちや青年たちにとって厳しく、生きづらいことが多いだろうなと思っています。

根本　この前の（福島県農民連）幹事会のテーマは「マグマ」と「かさぶた」でした。鬱屈したマグマは、熱量はまだ少ないけど、うごめいている。

齋藤　私が子どものころ、その頃の「父親世代」のかさぶたは、「岩盤のような戦争体験」なんですよ。父を超えられない理由が、ここにあったと思っています。後になっていろいろ学ぶ中で、この「かさぶた」は多義性を備えた代物であることが分かってきた。当時の大人たちは、この岩盤とともに多くはひっそりと生きてきた。そして私に即していえば「戦争体験」という父親の「かさぶた」は、突き破るものとして準備されていたと思っています。突き破れたかどうかは別として。

じゃ、私たちの次の世代はどうなんだと。突き放した言い方だけど、「もっと苦しみもがけ」―俺たちはあと残りの人生をもう一回一矢報いるたたかいに挑むから。「かさぶた」の矜持をもってね。

根本　さらにかさぶたの質を磨かなきゃいけないね。

齋藤　かさぶたは、たえず自分で磨かなきゃいけない。それを突き動かす者たちのためにも。

（2月号に続く）

農民連フラッシュ flash

作る人と食べる人の集う産直カフェ20周年祝賀会

10月29日産直カフェで、20周年を祝う祝賀会が開催され、多くのお客様、生産者が集いました。東日本大震災やコロナ禍を乗り越え、これからも農と食を繋ぐ重要な拠点といて頑張っていくことが語られました。朝早くから準備された、女性部の皆さん手作りのお料理が大変喜ばれました。

第37回福島県農民連定期総会開催 - 郡山市ホテル「華の湯」

12月3日、久し振り宿泊での総会です。ご来賓の立憲民主党の金子恵美議員の「重要な予算（農林水産）が一番蔑ろにされている。」という農のために働きたいとの思いが伝わりました。総会の中での発言は、次の担い手づくり、技術への要求、アグロエコロジーや新しい取り組みについてなどなど時間内に収まらず、想像以上に盛り上がった総会となりました。懇親会の出し物も、どの単組も積極的で、輝いていました。

福島農民連の電気購入できます！

福島農民連産直農協で発電している電気を「みんな電力」から購入や応援することができます。再生可能エネルギー100%の電気も選択できます。みんなの選択で地球を冷やします。みんなの選択で地球を冷やしましょう。

https://minden.co.jp/personal/

二本松発電所